

芸術監督 井上桂の

この人のここに注目!!



腕利きベテラン刑事役

近藤芳正さん

深みある存在感の俳優さん

50代の僕らの世代には、近藤さんというと三谷幸喜作品の常連というイメージが強い俳優さんです。中でも『笑の大学』では、警視庁の取り調室で検閲官から責められる座付き作家役が印象的でした。奇しくも『斜交』では、逆に犯人を追い詰めていく伝説の刑事という役柄です。

近藤さんは舞台上で活躍する一方、多く映画・ドラマなどにも多く出演、出演数はゆうに100本を超えるベテラン俳優さんです。その役柄は幅広いのですが、どんな人物であっても、どこか可笑しさや朗らかさのある深みのある演技で、見る人に忘れがたい印象を残してくれます。そのせいか、主人公の対立軸にある役柄も多く、物語の中では盛り上がりや重さを託されています。多岐にわたる活躍をみるにつけ、現場の作り手にも絶大な信頼を得ている俳優さんだなと思います。

さて、今回の舞台『斜交』は、名刑事・平塚八兵衛さんの取り組まれた事件の書籍を読んでいて、“この人の目には多くの容疑者や犯人、また、そういう人物を産み出した社会はどう見えたのだろうか、それを舞台にしたら面白いのではないか”というところから企画が始まりました。調べていくと、罪は憎んでもその人までは憎んでいない方だったことも分かり、その心の内が表現できたら素敵だな、と思いました。果たして、誰にその役ができるだろうと、水戸芸術館ACM劇場の前監督の高橋知伽江さんと企画の相談したとき、この複雑な心境を担える刑事役は近藤芳正さんだ、と期せずして名前が同時にあがりました。早速ご相談にうかがうと、二つ返事で引き受けて下さり二人で欣喜雀躍した記憶があります。

この物語の焦点である「取り調べ」は、いかにして容疑者のアリバイを崩し、供述の矛盾から犯行を白状させることです。刑事は、

のらりくらりする容疑者に、時に理論で時に強面で時に柔軟に迫っていきます。観客はその展開を楽しんでしまいがちですが、演じる方としたり長距離マラソンを全力疾走させられているよう。しかし、近藤さんが演じられると、刑事としてのあらゆる手練手管を駆使しながら犯人に迫っていく姿に、凄みどころか刑事としての誇りや生き様までが見えてきます。それはまるで、“近藤芳正”という俳優の居まいそのものようで、その姿勢に鳥肌が立つほどです。

私は、最初の通し稽古を見終わった時、眼がしらに涙がたまっていました。素晴らしい作品だという観客の涙でもあり、この作品に命を吹き込んでいく俳優さんの凄さにも圧倒された、そんな感動でもありました。近藤さんにしかできない、そう思わせてくれる舞台上に仕上がったなと思います。

この舞台一観客としてとても楽しみです。



PROFILE

こんどう・よしまさ ●デビューは1976年の『中学生日記』(NHK総合)から。高校卒業後、上京し演劇活動に入る。東京サンシャインボーイズに欠かせない客演俳優として脚光を浴び、テレビ、映画、舞台上で幅広く活躍。2001年より自身がプロデュースする「劇団『ダンダンブエノ』」の主宰を務める。あらゆる役に深く踏み込む演技力と表現力に定評があり、舞台・映像とも欠かせない存在の一人。'09年からはダンダンブエノから派生したソロ活動として「バンダ・ラ・コンチャン」を始動。劇作家・古川健作品への出演は2回目であり、その1回目は「バンダ・ラ・コンチャン」との共同企画でもある。プロデューサーとしても後進の育成も視野に入れた活動をしている。ケイダッシュ所属。